

21世紀は

木の世紀

iPodにも接続できる
木のラジオ

「より少ない木材で、多くの仕事を」をコンセプトに、インドネシアの小さな村で生まれた木製品ブランド「マグノ」。木のラジオ(18900円)は、iPodやiPhoneとの接続も可能。木の時計(7980円)は、秒針がなく静か。



秋田杉で作った木製電気自動車

秋田の県立技術専門学校3校の生徒が共同制作。伝統工芸の曲げわっぱを作る手法を取り入れて木を加工した。フェアレディZをモデルにしたという。

国産ヒノキを
使用した携帯電話

NTTドコモは、四十万ヒノキの間伐材を使用した「タッチウッド」を今年3月に発売。間伐材の価値を引き上げることで林業を活性化し、日本の森を豊かにするのが目的。価格は7万7910円で、1万5千台の限定販売。

いまさら木でもないだろう。そう思った人は、木の底力を甘く見ている。内装材に使えば患者を癒し、子どもの活動範囲を広げる。工業製品を作れば、最新素材に負けない性能を発揮する。何より、森林は地球環境に計り知れない影響を及ぼしている。こんな大きなポテンシャルを持つ木を見直さない手はない。時代は「コンクリートと鉄の世紀」から「木の世紀」へ。

文：田中淳夫(責任編集)、吉田広子・形山昌由(編集部)

スイスでは持続可能な森の利用を目指して、「近自然森づくり」が広がっている(背景写真提供：佐藤浩行)

一流企業を辞め、木工職人を目指す若者たち 震災をきっかけに、循環素材の木が脚光浴びる

サラリーマンを辞め、飛騨

山奥の木工職人を養成する「森林たくみ塾」へ修行に来た若者たちがいる。入塾2日目から作品作りに没頭し、卒業までの2年間、ひたすら木工製品を作り続ける。遊び盛りの彼らが惜しみなく時間を注ぎ、気持ちを駆り立てる木の魅力とは何か。

大学で建築デザインを専攻して大手ゼネコンに入社した平井健太さん(27)は、日々の仕事に違和感を感じていた。「何もない所に顧客の求めるものを作る楽しさ」が好きで、建物のデザインが出来る意匠関連の部署を希望した。望みどおり配属され、オフィスビル、病院、学校などさまざまな分野の設計図を描いた。シヨッピングセンターのイオ

ンモールも手がけた。

だが、何かしつくりこない。コスト優先主義から設計者の良心が施工に生かせないジレンマ。何より、顧客とコミュニケーションを取りながら、納得できるものを作り上げていく作業をするには、会社が大きすぎた。

「結局、頭でっかちだったのです。設計図は書けるけど、自分ではモノを作れない。そうなる現場の人たちに自分の主張を通していくことが難しく、すごく悔しい思いをしました。作れる技術を身に付ける必要性を痛感して、その結果、選んだのが木工でした」

徹底した実践型教育を導入したことで知られる森林たくみ塾の授業内容は、衝撃的だった。工作機械の使い方も教わらないうちから、どん

んモノづくりをやらされる。

「初めの作業は、ベルトサンダーを使った面取りでした。入塾2日目にいきなり1200枚分をやってくれといわれて。それが何に使われるのかさえ分かりませんでした。とにかく必死にやりました」

驚きの連続の毎日だったが、木でモノづくりができる喜びから、平井さんは作業にのめりこんでいった。製作にかかわっているうちに、知らず知らず基本的な木工技能を修得していった。毎日が楽しくて仕方ないと、目を輝かせる。

平井さんは木の魅力をこう話す。

「金属、ガラス、コンクリートなどよりも加工性に優れ、どんな新素材もかなわない経年変化の良さがあります。それに木は難しい。加工後も伸縮するし

曲がり続ける。それを想定しながらつくる奥深さがあります」

震災で消費行動変わる

久保洋人さん(27)は、カレンダーを製作する会社を辞めてここに来た。机に座り、商品の在庫確認をする毎日に物足りなさを感じていた。

そんなとき、先輩が森林たくみ塾で木工職人を目指しているという話を聞いてみるとイキイキしていた。木を扱った経験は全くなかったが、自分も木工に懸けてみることにした。久保さんも木の難しさが、奥深さや魅力につながっているという。

「最初に焼印を押す仕事を任されました。木によって香りが違うのはもちろんですが、焼印の押し加減も違うのです。個性があつて一筋縄ではいかない魅力があります」

平井さん、久保さんの二人は卒業後、木工職人として生計を立てることを夢見ている。

入塾希望者は、一時の減少傾向に歯止めがかかり、再び増えているという。今年に入ってから問い合わせ件数は、400件を超えた。卒業生の就職率は100%。ここで得た技術を使い、木にかかわる何らかの仕事をしている。

理事長の佃正壽さんは言う。



上・たくみ塾へ通うため、大阪から夫婦で飛騨高山へ移り住んだ平井さん
下・久保さんは「働いていたときには感じなかった人間味を木工では味わえる」という



「3月11日の震災をきっかけに、人々は世の中に流通している物の動きが見えるようになりました。消費行動が変わってきているのをひしひしと感じます。循環的な木は、消費者の判断に十分耐えられる素材。これから再び日本人

に選ばれる時代がくるのではないでしょうか」



日常生活にあふれている木の製品。人間は木に囲まれるとどう感じるのだろうか。それを実践した病院があった。

「待合室で過ごすのが楽しみ」 院内を木造りにしたクリニック

精神病棟のなかで、錯乱を起したり暴れたりした患者が一時的に入る隔離室。院長自らが隔離室に閉じ込められ、患者が精神の安静を保つために何が一番良い環境かを考えた。どうすれば苦しみを最小限に抑えられるのか。その答えは、木の温もりだった。

2007年に開院したあいち熊木クリニック（愛知県日進市）の熊木徹夫院長は、あ

る信念を持っている。それは、「精神科クリニックで唯一最大の治療道具は『建物』である」ということだ。

熊木院長は、これまで新しい精神科病院に赴任するたびに、看護師に隔離室に閉じ込めてもらってきた。外からしか鍵をかけられないので、いわば閉じ込められた状態になる。

そこに入り、患者の気持ちに寄り添うために中から眺め

てみた。無機質な壁と天井が見えた。「隔離室は精神を安定させる場であり、圧迫感がなく、体に触れる壁の質感に温もりを持たせることが大切だ」。そう思った。

熊木院長は、「特に精神科クリニックでは、虐待など『特別な体験を語る場』としての空間づくりが重要」と話す。理想的な治療空間について考え続け、建築家との勉強会も重ねた。

そこで、あいち熊木クリニッ

クでは、温もりを感じる木材を全面的に採用した。院長自らが買い付けに足を運び、フローリングや壁、天井などには、愛知県産の無垢の杉板を使用している。

玄関を開けると、天然の杉の香りに包まれ、吹き抜けが気持ち良い待合室が現れる。スリッパは置いていない。素足で木に触れ、杉の香りを感じることと五感を解放し、患者の癒しにつながるためだ。木の内装は、結露しにくく、湿

度も一定しているので、1年中過ごしやすい。

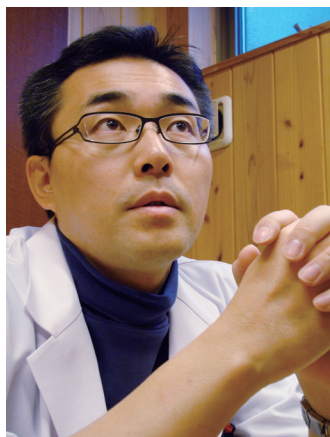
「通院が楽しみ」の声も

その待合室を抜けると、「いちようの間」「栗の間」「けやきの間」など木の名前が付いた診察室に辿り着く。中心には、名前の通り、木の大きなテーブルがあり、テーブルを囲んで話ができるようになっている。

診察室を過剰に密閉してしまふと、患者が子ども返りをしたり、泣き喚いたりするなど「退行」の症状が表れる場合があるという。そのため、姿は見えなくても、人の気配がそれとなく伝わる作りが、臨床の場には適している。木の適度な建付けだとそれが



上・杉の香りと吹き抜けが気持ちの良いあいち熊木クリニックの待合室。大きな木箱のようだ
下・「患者だけでなく、長時間勤務になりがちな治療者にとっても良い環境を作りたい」と話す熊木徹夫院長



できる。空気や人の流れが滞留することのないように、各部屋が袋小路にならない工夫もした。

同院には、1日に70—80人が来院する。うつ病やパニック障害などの患者にとつては、通院そのものが負担になる。病院に来るまでの間、街中や電車のなかで強いストレスを溜め込んでしまう。とこ

ろが、同院には「和む」「待合室で過ごすのが楽しみ」といった声が多く寄せられる。なかには、黙って泣いていたが、「木に包まれて癒された」と話し始める患者もいたという。

木造りの部屋は人間にとつて特別な空間となり得るのか。あいち熊木クリニックの試みは一つの回答を示しているように思える。

木質化後、廊下で遊ぶ児童が増加 木の飼育箱ではネズミも長生き

木に温もりや安らぎを感じる人は多い。科学的に木の魅力は証明できるのだろうか。

静岡大学農学部が1988年に行った「木の居住性」についての興味深い実験がある。

マウスを木製、金属製、コンクリート製の3種類の飼育

箱で飼育した。内部には巣作りのために杉の削りくずを入れ、固形飼料と水を与えた。マウスに起きる生物的反応で木の居住性を評価したところ違いがはっきりと出た。

母マウスの「妊娠」や「分娩」には大きな差はなかったが、飼育箱で生まれた子マウスの生存率に違いが出たのだ。生

後23日後の生存率がコンクリート製の飼育箱は6.9%、金属製は41%だったのに対して、木製では85・1%に達した。体重も木製の飼育箱のマウスが一番増加していた。

理由は、熱伝導性の低い木箱は子マウスの体温を奪わず、吸湿性も高いので、汗などの水分を吸収したからだと言われる。そのため、体力の消耗が少なく、生存率が高かったといわれている。

「実験結果を人間に当てはめるのは早計」との意見もあるが、木材活用に向けた議論をする際の参考になりそうだ。

木が人間に及ぼす影響を調べる研究も行われている。埼玉大学教育学部の浅田茂裕教授によると、林野庁の働きかけもあり、この5年ほどで公共建築物に木材を積極利用する例が増えてきているという。既存の建物の床や壁などに木材を使用する「木質化」も進んでいる。

浅田教授は、木材の持つ触感や視覚特性は、子どもの学習に好ましい影響を与えると

考え、内装木質化校と非木質化校のストレス反応を比較した論文を2009年に発表した。

木の部屋は広く感じる

それによると、一人あたりの占有面積は木質化校の方が少ないにもかかわらず、教室空間に対し広々としたイメージを持つている児童は72・2%、非木質化校では23・9%であった。さらに木質化校では、子どもたちが廊下など教室外へ出て活動する時間が増えたという。

浅田教授がこうした学校を訪問すると、以前は廊下で遊ぶ子どもがほとんどいなかった学校でも、木質化後はクラスあたり10人程度の児童が廊下で転がって遊ぶ姿を見かけるようになった。「人間は本能的に自分に近い身近な素材を求めているのではないか」(浅田教授)と分析する。

女子児童のストレス反応の比較では、木質化校よりも非木質化校でストレスが高いことがわかった。「おなかが痛く

なる」では約17%、「耳鳴りがある」「集中できない」では約8%の違いが出た。

浅田教授の研究室を訪れると、木の香りが一面に漂う。ヒノキのテーブルや棚などに加え、木とレースなどを組み合わせで作ったネックレスやピアスなどが置いてある。学生と一緒に立ち上げた「woodlie(ウッドライク)」プロジェクトで制作したものだ。「木で何かを作ることには、自己肯定感にもつながる」(浅田教授)という木育の考えのもとに始めた。

ここで製作した木の小物は、林野庁が主催する「森林の市」やフリーマーケットなどで販売する。メンバーで大学院生の長南あずささん(教育学研究科1年生)は、「どこかに有りそうでないのが魅力。新しい木の使い方を提案していきたい」と話す。

木を使った日常製品としてすぐに思い浮かぶのは、テーブルや椅子など家具が中心だろう。だが意外なものもある。次はそれを紹介しよう。